韓国大邱市の大規模都市緑地の保全と活用に関する研究

A Study on the Conservation and Practical Use of Large Scale Urban Forest in Teagu, Korea

権 奇燦*

Keechan KWUN

摘要：本研究では、韓国の大邱市に存在する7カ所の大規模な都市緑地を対象として、都市緑地が保有する物的ポテンシャルの評価結果と居住者の緑地に対する意識評価結果との相互関係を捉えることにより、保全と活用の視点から都市緑地の整備の方向性を探った。その結果、大邱市での都市緑地の利用は、江戸期の日本の物見遊山的利用が中心となっており、この歴史的文化的背景は今後の緑地整備において充分配慮すべき事項であることや緑地が保有する自然環境を背景として、緑地利用の活性化や微気象調節効果、自然性の供給効果などが顕在化していることから、自然環境の保全を基調とした活性化策を探ることが重要な課題であることを明らかにした。

はじめに

環境問題が地球的課題となっている中で、市街化が激しく進められている韓国の大都市地域では、地価の高騰とともに都市内の自然の緑が急速に消失しつつあり、都市環境やアメニティにとって多くの問題点が表出しつつある。このような背景の中で、韓国の大都市における都市緑地、特に都市環境に影響の大きい都市内大規模緑地に対しては、レクリエーション需要への対応とともに良好な都市環境の形成に寄与する保全の必要性が高まりつつある。

都市緑地に対する研究としては、従来より、居住環境として求められる緑量の測定方法、市街地内の斜面緑地の保全¹⁾、緑地環境の都市比較²⁾、都市らしさと緑地景観に関する研究³⁾など多様な研究がなされている。筆者らも、人間の意識評価を通じて緑地が保有する各種の効果を明らかにする評価手法の開発とともに計画技法へのアプローチが重要な意味を持つとの観点から、保存緑地に対する居住者の意識評価への影響要因を保存緑地の持つ物的諸特性との関わりあいから探る研究⁴⁻⁶⁾を進めてきている。

本研究では、韓国の大邱市に存在する7カ所の大規模な都市緑地を対象とし、都市緑地が保有する物的ポテンシャルをメッシュアナリシスを用いて保全と活用の視点から評価するとともに、都市居住者へのアンケート調査を通じて都市緑地の利用状況と各種効果に対する意識評価を明らかにし、物的ポテンシャルの評価と居住者の意識評価との相互関係を捉えることにより、保全と活用の視点から都市緑地の整備の方向性を探ることを目的とした。

1. 研究の方法

本研究では、韓国大邱市において現況林が含まれている150ha以上の7カ所の大規模な都市緑地を調査対象として設定し、物的ポテンシャルを捉えるためのメッシュアナリシスと居住者の都市緑地に対する意識評価を把握するためのアンケート調査を実施した。なお、図-1に7カ所の都市緑地の位置を示している。

(1) 物的ポテンシャル調査

物的ポテンシャルは、平成4年韓国国土地理院発行の1/25,000の地形図をベースとした一辺250mを単位メッシュとするメッシュアナリシスを通じて把握した。

メッシュアナリシスでは、上記の地形図を用いて、地形傾斜は30°以上、15°～30°、15°未満に分類し、眺望度は独立峰、1次及び2次尾根から1km以上の眺望可能な方位を、全8方位の内、

7方位以上、4～6方位、3方位以下に分類し、交通施設は道路を道路幅員1.5m未満を山道、1.5～5.5mを歩車共用道、5.5m以上を自動車道に分類した。植生レベルは1/25,000(韓国山林庁発行、1986年)の相観植生図を用いて、自然植生、代償植生をランク1、植林地、草原をランク2、農耕地、造成地、市街地をランク3に分類した。次いで、大邱市自然環境資料集⁷⁻⁸⁾を用いて、自然景観資源としては河川、池、滝、山頂、峰、人文景観資源としては史跡、社寺、城跡、レクリエーション資源としては休養・休息施設、運動施設、教化施設、宿泊施設を読み取った。

なお、地形傾斜、植生レベルは単位メッシュにおいて最大面積を占める分類項目をその単位メッシュの内容として代表させ、その他の項目に関しては、分類項目の存在の有無をそのメッシュの内容とした。

(2) アンケート調査

アンケート調査は、大邱市内の7つの区毎に無作為に300名の被験者を抽出し、平成7年8月末にアンケート調査票を配布し、9月中旬に郵送回収する留置方式で実施した。配布数は2,100票、有効回収数は484票で有効回収率は23.0%であった。設問は、1.利用経験のある緑地と最もよく利用する緑地の抽出、2.最もよく利用する緑地の利用目的と利用頻度、3.最もよく利用する緑地に

図-1 対象都市緑地の位置

*大阪府立大学農学部

対する現況評価とその緑地がもたらす各種効果の評価、被験者属性に関する設問で構成した。

なお、本研究の解析対象とした設問は、1.の最もよく利用する緑地の抽出数、2.の利用目的と3.の現況評価と効果の評価である。

利用目的は図－3に示す8項目で複数回答を求め、現況評価は表－2に示す10項目に対して「非常に満足～非常に不満」の5段階尺度を用い、効果の評価は表－3に示す12項目に対して「非常に感じる～感じない」の4段階尺度を用いて評価を求めた。

(3) 解析方法

物的ポテンシャルは、計測によって得たメッシュデータを表－1に示すように全メッシュ数に対する割合(%)と各緑地の都市の土地利用現況図上の位置図から把握した。

アンケートの解析では、最もよく利用する緑地の抽出数と利用目的は単純集計、現況評価については10の評価項目に対する5段階尺度にそれぞれ非常に不満を1点から非常に満足を5点の評価点を与え、各緑地毎に各々の被験者の評価点を基礎データとして因子分析(バリマックス法)を行い、その因子負荷量を用いて各緑地別の意識評価の構造を把握した。次いで、各緑地毎の項目別平均評価点を算出し、その評価点を用いて考察を進めた。緑地がもたらす効果に対する評価特性については、12の評価項目に対する4段階尺度にそれぞれ感じないを1点から非常に感じるを4点の評価点を与え、各緑地毎に各々の被験者の評価点を基礎データとして因子分析(バリマックス法)を行い、その因子負荷量を用いて各緑地別意識評価の構造を把握した。

2. 解析結果及び考察

(1) 物的ポテンシャルの解析結果

表－1は、メッシュアナリシスから得た物的諸特性を示している。図－1および表－1から各緑地の物的ポテンシャルを捉えみると、緑地1は市街地と開発制限区域を隔てた郊外部に位置する大邱市を代表する緑地であり、歴史的に由緒ある古い寺が2カ所存在し、歴史的に市民から親しまれてきた緑地である。主に15°以上の急傾斜地で構成されており、自然植生あるいは代償植生によって90%のエリアが覆われている。また、自然景観資源は、河川を中心にやや多く主に自然性が非常に高い緑地である。さらに、緑地内の山道の整備状況は良い。緑地2は、緑地1に隣接する郊外部に位置し、松林の有名な所として昔ながら地名は知られている。山麓部を多く含んでいることから緩斜面も多く占めており、植生は自然植生あるいは代償植生が80%程度占めている。また、レクリエーション資源はなく、緑地内外ともアクセス性が低い状況にある。緑地3は、市街地の外延部に位置しているものの市街地と接する部分に道路と中高層の住宅団地が遮っており一般市街地からのアクセス性が低い状況にある。また、山麓部の入口には施設ゾーンが整備されているほか、昔からの名所となっておりケ-

ブルカーが敷設されている。15°以上の急傾斜面が大部分を占めており、自然植生あるいは代償植生によって90%のエリアが覆われ、自然景観資源は河川を中心にやや多く主に自然性が非常に高い緑地である。緑地内の山道の整備は非常に高い水準にある。緑地4は、市街地の中心部の独立した丘陵であり、大部分の市街地から眺望できる緑地である。ほとんどが緩傾斜地で構成されており、造成地を多く含んでいる。緑地内では、山道や歩車共有道が多く整備されているほか、レクリエーション資源も多く存在し特に利用性が高い緑地である。緑地5は、緑地1、2と同様に郊外部に位置しており、道路整備が遅れていることからアクセス性は低い状況にある。ほとんどが急傾斜地で構成され、自然植生あるいは代償植生によって80%強のエリアが覆われている。レクリエーション資源は殆ど含まない自然性だけが非常に高い緑地である。緑地6は、市街地の外延部に位置しており、近年、古墳公園として整備されつつある。ほとんどが緩傾斜地で構成され、多くの草原を含んでいる。緑地内では山道の整備水準が高くレクリエーション資源もやや含まれている。緑地7は、市街地の外延付近に位置し、緩傾斜地で構成され、草原を多く含む緑地であり、レクリエーション資源はやや存在するものの山道の整備率は低い状況にある。

(2) 意識評価の解析結果

(i) 最もよく利用される緑地とその利用目的

図－2は、最もよく利用する緑地として指摘された回答数を示し、図－3は、その利用目的の構成比を示している。

最もよく利用する緑地として指摘された緑地を見ると、緑地1は、全回答数の40%以上(210人)を占め、大邱市で圧倒的によく利用される緑地であることが読み取れる。次いで、緑地3と4はそれぞれ104人、89人と20%程度占めており、かなり利用されている。一方、緑地5と7はそれぞれ11人と14人と非常に少なく、緑地2と6も30人と26人と少ない状況にある。

上位3緑地の利用目的を見ると、緑地1では、散歩、自然鑑賞などの休養の場、人との付き合いの場がそれぞれ42.3%、38.5%、33.3%と静的利用が中心となっており、運動・スポーツは20.9%である。緑地3では、散歩、自然鑑賞などの休養の場といった静的利用がそれぞれ50.9%、40.3%と高いものの運動・スポーツも36.5%と高くなっている。緑地4は、散歩が47.1%とやや飛び抜けて高く、次いで、人との付き合いの場、運動・スポーツ、自然鑑賞などの休養の場がそれぞれ37.0%、34.8%、33.7%と続いている。

以上の解析結果と各緑地が保有する物的ポテンシャルとの相互関係を捉えと、緑地1は市街地と一般の利用が制限されている開発制限区域(都市のスプロール防止や周辺自然環境及び国家保安上開発が制限区域)を挟んで隔てているものの利用が最も活性化している理由は、歴史的に由緒のある寺院を2カ所含んでおり、

表－1 物的ポテンシャル

	メッシュ数 (面積)	地形傾斜			植生レベル			眺望度			交通施設			自然景観 資源	人文景観 資源	レクリエーション 資源
		30° 以上	15° / 30°	15° 未満	ラン ク 1	ラン ク 2	ラン ク 3	7 方位 以上	4～ 7 方位	3 方位	1.5m 以下	1.5m / 5.5m	5.5m 以上			
緑地1	514 3200ha	60 13%	344 67%	110 21%	461 90%	2 1%	51 10%	13 3%	63 12%	32 6%	147 29%	42 8%	25 5%	130 25%	13 3%	14 3%
緑地2	68 430ha	11 16%	31 46%	26 38%	56 82%	6 9%	6 9%	2 3%	3 4%	2 3%	12 18%	4 6%	11 16%	27 40%	2 3%	0 0%
緑地3	265 1600ha	44 17%	183 69%	37 14%	239 90%	12 5%	13 5%	5 2%	27 10%	8 3%	83 31%	25 9%	18 7%	63 24%	11 4%	6 2%
緑地4	29 180ha	0 0%	3 10%	26 90%	11 38%	7 24%	11 38%	2 7%	4 14%	1 3%	0 0%	15 52%	12 41%	5 17%	1 3%	9 31%
緑地5	313 2000ha	42 14%	201 64%	70 22%	263 84%	27 9%	23 7%	13 4%	34 11%	7 2%	75 24%	33 11%	0 0%	67 21%	2 1%	0 0%
緑地6	42 275ha	0 0%	9 21%	33 79%	23 55%	14 33%	5 12%	1 2%	4 10%	3 7%	12 29%	4 10%	6 14%	15 36%	7 17%	5 12%
緑地7	22 150ha	0 0%	0 0%	22 100%	12 54%	7 32%	3 14%	2 9%	4 18%	1 5%	3 14%	7 32%	3 14%	2 9%	1 5%	4 18%

* 植生レベル：ランク1-自然植生及び代償植生、ランク2-植林地、草原、ランク3-農耕地、ゴルフ場、造成地

図－2 最もよく利用する緑地の回答数

住民との歴史的つながりが最も深いことが大きな要因と考えられる。そのような中で、豊かな自然と歴史的な人文資源を背景として、コミュニティの場や静的な利用の場として利用されているものと考えられる。次いで、利用の活性化している緑地3は、ケーブルカーが整備されているように古くからの大邱市の名所であるとともに市街地の外延に接していることや山麓部にスポーツ施設が整備されていることによって利用の活性化が図られていると考えられ、利用目的にもその傾向が現れている。緑地4は、市街地の中心部に存在する独立した丘陵であり日常的に行動的にも視覚的にも住民と接触が最も高い緑地であることから利用の活性化が図られているものと考えられ、第1位の利用目的である散歩にもその傾向が現れている。一方、利用が最も不活性な緑地5と7は、開発制限区域を隔てた位置と市街地の外延部付近に位置しており、住民と日常的に視覚的な接触が少ない上に特筆すべき資源や歴史的な背景もなく、一見すると通常の山と何が変わらないことから利用の不活性が起こっているものと考えられる。また、緑地2と6は、若干利用されているが、これは、緑地2が松林として歴史的に有名であったといった歴史的背景が存在することと緑地6は近年古墳公園として整備が進捗しつつあることによるものと考えられる。

なお、以下の解析は、サンプル数も多く大邱市での重要な緑地として位置づけられる上位3緑地に対して進めるものとした。

(ii) 現況評価に対する意識構造と評価結果

表－2は、各緑地ごとに現況に対する評価結果の個人データを用いた因子分析結果の因子負荷量を示しており、図－4は、3緑地の平均評価点のプロフィールを示している。

表－2から、各緑地の現況評価に対する意識構造をみると、緑地1では、評価の主軸となる第1因子はトレッキングなどの運動のしやすさ、自然観賞など休息のしやすさ、散歩道の歩きやすさが0.5以上の高い値を示し、第2因子は草花の豊かさ、第3因子は景色展望の良さが0.5以上の高い値を示す。緑地3では、第1

図－3 利用目的

因子は緑地1と同様の3項目が0.5以上の高い値を示し、第2因子は昆虫や野鳥などの生物の豊かさと景色が自然的であるが0.5以上の高い値を示すが、第3因子では0.5以上の高い値を示す項目はない。緑地4では、第1因子は緑地1と同様の3項目に加え利用の安全性、景色展望の良さが0.5以上の高い値を示し、第2因子は、項目1の樹林の豊かさから項目3の生物の豊かさがマイナス0.5以上の高い値を示し、第3因子は周辺との調和性、景色が自然的であるが0.5以上の高い値を示す。

次に図－4から、3緑地の現況評価結果を見ると、評価の傾向は全体的に似ており、草花の豊かさと生物の豊かさの2項目だけがプラス側の評価になっており、他の評価項目はほぼどちらでもないといった中間値付近の値を示している。3緑地で評価が若干異なる点は、緑地1では、項目1の樹林の豊かさから項目3の生物の豊かさと項目7の景色が自然的であるといった自然供給に関する項目が他の2緑地に比較して高い点である。一方、緑地4では、利用の安全性と散歩道の歩きやすさといった利用面に関する項目が若干高くなっており、緑地3は、緑地1と緑地4の中庸な評価を示している。

以上の解析結果と各緑地が保有する物的ポテンシャルとの相互関係を捉えと、緑地1は市街地と開発制限区域を挟んだ郊外部に位置し豊かな自然環境を保有していることから、自然地域内での活動に対する点が強く意識され、次いで、自然環境面、最後に利用面や景観面が意識されたものと考えられ、この意識構造は自然供給面での評価が高いといった結果にも反映されている。一方緑地4は、市街地の中心部に存在し草地や造成地なども多く含んでいることから、自然地域内での活動とともに利用面や景観面も強く意識されるが自然環境面の意識が弱くなったものと考えられ、この意識構造は現況評価の結果にも反映されている。また、緑地3は市街地の外延部に位置し緑地1と同様に豊かな自然環境を保有していることから、緑地1と緑地4の両面が意識されたものと考えられる。

表－2 現況評価の意識構造

	緑地 1			緑地 3			緑地 4		
	I	II	III	I	II	III	I	II	III
1. 樹林の豊かさ	0.259	0.487	0.216	0.160	0.331	0.489	0.229	-0.671	0.303
2. 草花の豊かさ	0.171	0.634	0.142	0.134	0.460	0.234	0.290	-0.636	0.110
3. 昆虫や野鳥など生物の豊かさ	0.073	0.495	0.168	0.242	0.577	0.068	0.135	-0.556	0.277
4. 利用の安全性	0.206	0.228	0.472	0.453	0.170	0.435	0.556	-0.412	0.068
5. 景色展望の良さ	0.329	0.246	0.629	0.318	0.354	0.485	0.523	-0.345	0.401
6. 周辺との調和性	0.273	0.382	0.457	0.328	0.101	0.456	0.059	-0.236	0.594
7. 景色が自然的である	0.474	0.285	0.360	0.253	0.567	0.318	0.213	-0.152	0.601
8. トレッキングなど運動のしやすさ	0.536	0.211	0.101	0.591	0.240	0.292	0.556	-0.197	0.118
9. 自然観賞など休息のしやすさ	0.695	0.218	0.314	0.543	0.289	0.232	0.603	-0.076	0.332
10. 散歩道の歩きやすさ	0.563	0.054	0.353	0.631	0.245	0.190	0.770	-0.203	0.061
固有値	4.061	1.188	0.903	4.155	1.064	0.905	4.204	1.296	1.078

* I:第1因子、II:第2因子、III:第3因子

図－4 現況評価特性

表－3 各種効果の評価構造

		緑地 1			緑地 3			緑地 4		
		I	II	III	I	II	III	I	II	III
景観形成	1. 都市の美しさ	0.253	-0.767	0.243	0.138	-0.802	0.229	0.807	0.244	0.181
	2. 都市の魅力	0.176	-0.750	0.247	0.182	-0.821	0.172	0.755	0.209	0.314
効果	3. 景色の調和	0.272	0.601	0.268	0.333	0.627	0.277	0.639	0.111	0.535
	4. 緑の豊かさ	0.313	-0.451	0.447	0.583	-0.439	0.395	0.685	0.284	0.376
利用効果	5. 緑地空間利用の楽しさ	0.325	-0.288	0.537	0.661	-0.249	0.214	0.546	0.503	0.257
	6. 人々との付き合い安さ	0.115	-0.105	0.509	0.475	-0.029	0.076	0.303	0.496	0.404
	7. 生活の潤い	0.195	-0.272	0.544	0.534	-0.249	0.293	0.249	0.213	0.598
	8. 自然に対する親しみ	0.398	-0.317	0.597	0.537	-0.193	0.468	0.517	0.267	0.490
微気象	9. 災害からの安心感	0.210	0.165	0.328	0.467	-0.239	0.333	0.191	0.202	0.615
	10. 空気のさわやかさ	0.705	-0.236	0.309	0.358	-0.280	0.608	0.468	0.543	0.234
気象効果	11. 四季の変化（季節感）	0.586	0.156	0.222	0.173	-0.163	0.663	0.075	0.626	0.133
	12. 夏の涼しさ	0.695	-0.292	0.225	0.225	-0.217	0.674	0.502	0.537	0.271
固有値		5.443	1.116	1.032	5.570	1.287	1.044	6.425	1.095	0.964

* I：第Ⅰ因子、II：第Ⅱ因子、III：第Ⅲ因子

（3）各種効果に対する評価構造

表－3 は、各緑地ごとに各種効果に対する評価結果の個人データを用いた因子分析結果の因子負荷量を示している。

緑地 1 を見ると、評価の主軸となる第 1 因子では空気のさわやかさ、四季の変化、夏の涼しさが 0.5 以上の高い値を示し、第 2 因子では都市の美しさ、都市の魅力、景色の調和がマイナスの 0.5 以上の高い値を示し、第 3 因子では緑地空間の利用の楽しさ、人々との付き合い安さ、生活の潤い、自然に対する親しみが 0.5 以上の高い値を示している。緑地 3 を見ると、第 1 因子では項目 6 の人々との付き合い安さを除く項目 4 の緑の豊かさから項目 8 の自然に対する親しみが 0.5 以上の高い値を示し、第 2 因子では項目 1 の都市の美しさから項目 3 の景色の調和がマイナスの 0.5 以上の高い値を示し、第 3 因子では、項目 10 の空気のさわやかさから項目 12 の夏の涼しさが 0.5 以上の高い値を示している。緑地 4 を見ると、第 1 因子では項目 1 の都市の美しさから項目 5 の緑地空間利用の楽しさが 0.5 以上の高い値を示し、第 2 因子では都市の美しさ、自然に対する親しみ、災害からの安心感が 0.5 以上の高い値を示し、第 3 因子では項目 10 の空気のさわやかさから項目 12 の夏の涼しさが 0.5 以上の高い値を示している。

以上の解析結果と各緑地が保有する物的ポテンシャルとの相互関係を捉えると、緑地 1 は、市街地と開発制限区域を挟んで隔たった位置にあり、3200ha といった広大な規模でしかもその面積の 90% が自然植生あるいは代償植生に覆われていることから、第 2 因子によって表される都市環境にのっての景観形成効果は意識されないものの、第 1 因子によって表される植生が生み出す微気象調節効果が強く意識されたものと考えられる。さらに歴史的な背

景を保有した緑地であることから、第 3 因子によって表される緑地の利用効果も若干意識されている。一方、市街地の中心部に独立した丘陵として存在する緑地 4 は、市街地の大部分から眺望することができることから、第 1 因子に景観形成効果が第 1 義的に意識され、次いで、第 2 因子に防災面と利用効果が意識されたものと考えられる。一方、市街地の中心部にあって面的にまとまった樹林を保有していることから、第 3 因子によって表される植生が生み出す微気象調節効果も若干意識されたものと考えられる。緑地 3 は、市街地の外延部に存在するものの一般市街地とは中高層の住宅団地によって分断された位置にあり、1600ha といった広大な規模でしかもその面積の 90% が自然植生あるいは代償植生に覆われていることから、第 2 因子によって表される都市環境にのっての景観形成効果は意識されないものの、第 1 因子で植生が生み出す自然性の供給効果と利用が強く意識されたものと考えられる。さらに、第 3 因子によって表される植生が生み出す微気象調節効果も若干意識されている。

4. まとめ

以上の解析および考察結果から、都市緑地の利用および緑地が保有する各種効果の評価は、緑地と居住者との視覚的接触とともに行動的接触の度合いを左右する緑地の立地位置とアクセス性、さらに、心理的接触の度合いを左右する歴史的文化的背景とともに緑地の内部条件に大きく依存していることが明らかとなった。すなわち、市街地と何らかの条件で視覚的接触の分断された緑地では、景観形成効果は期待されないこと、一方、市街地からの眺望性が確保された緑地では景観形成効果への期待が高まるということが明らかとなった。また、利用行動の活性化には、緑地が保有する歴史的背景が大きく寄与しており、心理的接触が重要な要素であることが明らかとなった。特に、大邱市での都市緑地の利用は、日本でいう物見遊山の利用が中心となっており、この歴史的文化的背景は今後の緑地整備において充分配慮すべき事項であると考えられる。さらに、利用行動を高めるためには、緑地へのアクセス性を高めるとともに、緑地内部の動線空間の整備が重要な視点であるといえるが、何れの緑地に対しても、豊かな植生や市街地内部でのまとまった樹林地が与える微気象調節効果や自然性の供給効果が期待されている点や、自然環境を背景として緑地の利用や存在効果が顕在化していることから、自然環境の保全を基調とした活性化方策を探ることも重要な点である。

なお、本論文における、大阪府立大学緑地環境計画工学研究室の先生方の、懇切丁寧な指導に対し感謝申し上げます。

参考文献

1) 金子忠一 (1989) : 市街地内斜面緑地の保全に関する研究 : 造園雑誌 52(5), 294-299

2) 浅川昭一郎他 (1983) : 緑地環境の都市比較に関する研究 : 造園雑誌 46(5), 235-240

3) 久保 貞他 (1984) : 都市らしさと緑

地景観に関する研究 : 造園雑誌 47(5), 177-182

4) 鈴木智子他 (1990) : ニュータウン内の保存緑地評価に関する研究 : 造園雑誌 53(5), 365-370

5) 権 奇燦他 (1991) : ニュータウン内の保存緑地活用計画に関する研究 : 造園雑誌 54(5), 257-262

6) 権 奇燦他 (1994) : 住民意識調査を通じたニュータウン内の保存緑地が保有する各種の効果に関する研究 : 造園雑誌 57(5), 187-192

7) 大邱直轄市 (1982) : 大邱の香り : 三一社

8) 大邱直轄市 (1986) : 八公山 : 三一社

Summary : The purpose of the paper is to point out the direction of maintenance of urban forests from the viewpoint of conservation and practical use of the 7 large scale urban forests existed in Teagu, Korea by catching the relationship of consciousness evaluation from the residents and evaluation results of the physical potential of the urban forests. It is shown that the forests are used as a jaunt place same as that in Japan in Edo era. Such kind of historical and cultural background should be considered sufficiently for the maintenance of the forests in the future. Natural environment which has the function of providing urban forests as the background, it is a very important issue to find out the revitalization policy for urban forests based on the conservation of natural environment, because the revitalization of using urban forests, its micro-whether controlling effect and its naturalness supplying effect etc. are becoming actual.